

Ⅲ. 「学びの杜・学術コース」 講義録

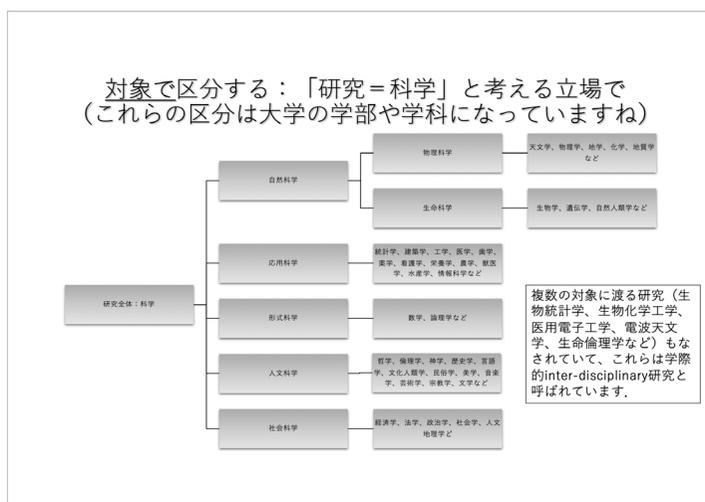
質的研究とは何か

講師：大谷 尚

講義実施日：2023年8月4日(金)14:45-16:15

「質的研究」の前に、「研究」というのはどういうものかという話をします。

この図は研究対象で区分しています。研究は科学であると考えると、大きくこんなふうに分かれます。



自然科学，応用科学，形式科学，人文科学，社会科学。このうち人文科学と社会科学はひとつにまとめて人社系と呼ばれることもあります。

自然科学は生命科学と物理科学に分かれます。生きているものを扱うか，生きていないものを扱うかという分類です。ただ，たとえば星からサンプルをとって調べてみる研究で，有機化合物があるかないか，すなわち生命があったのかなかったのかを調べる場合もあるので，それぞれの学問分野が単独で動いているというわけではありません。昔の研究者は専門をひとつだけ持つのが普通でしたが，今はπ型といって2つ以上の専門を持っているのが強い，望ましいと言われることもあります。もちろん共同で研究することによってもそれは達成できます。

応用化学には統計学，建築学，工学，医学といったものが入ります。医学は自然科学ではないんですね。たとえば病気を治すにはどうしたらいいかということになると，対象に介入していくことになります。自然科学の場合は，たとえば天文学をするのに星に介入することはない。観察には行きますしサンプルを取ることもあります，ちょっと星を動かしてみようとはなりません。基本的には介入したり何かを作ったりするようなものは応用科学と呼ばれます。

形式科学には数学や論理学が含まれます。数学や論理学は物を扱っているわけではありません。小学校の算数では，鉛筆が何本ありますか，合わせていくらですといった話をするので物を扱

いますが、もともと数学というのは物を扱っているのではないのです。数というものをまずは見出して、それがあつという前提で頭を働かせるのが数学ですね。論理学もそうです。論理というものがあるわけではない、私達が見出すのです。

人文科学と社会科学の切れ目というのはけっこう難しいのですが、社会の仕組みのようなものをみていくのが社会科学で、人の暮らし、それも制度のようなものではなくてナマのものを見ていくのが人文科学ということになります。

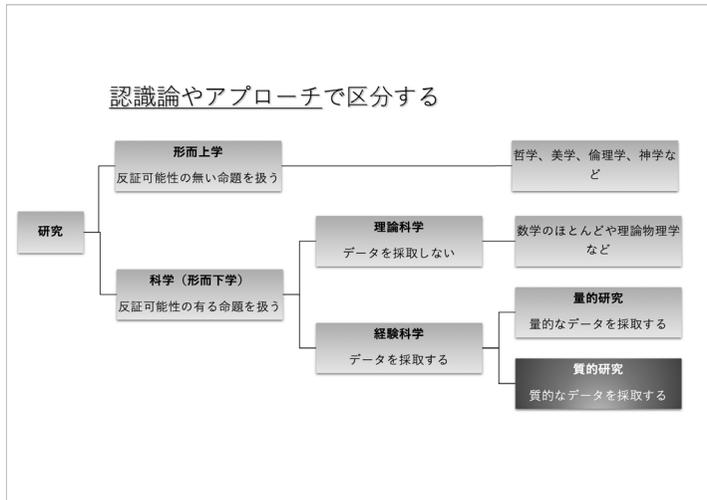
人文科学の三番目に神学が入っていますね。なぜ神学がここにくるかという、歴史が古いからです。ヨーロッパの古い大学はすべて神学のため、キリスト教の研究をするための施設でした。たとえばオックスフォード大学も、パリ大学もそうです。だから大学の設置認可(チャーター)は法皇が出していました。それを「ペイパル・チャーター」といいます。法王を指す「ポープ pope」の形容詞が「ペイパル papal」なんです。法王に認められないと大学ができない。なぜかという、大学の中心は神学だったからです。それがやがて、王様が出すようになります。それが「ロイヤル・チャーター」。私が2年間いたことのあるトロント大学の、ユニバーシティ・カレッジという中心部分は、ヴィクトリア女王が設置認可を出していました。これがロイヤル・チャーターです。実はこのユニバーシティ・カレッジは、当初神学部として作ろうとしていました。ところが non-determination つまり非宗派的なものにすることになり、一般の大学として作りましょうということ、ヴィクトリア女王の認可を受けることになったのです。そのころは王様が設置認可をしていたのです。今はガバメンタル・チャーターと言って、国(政府)が設置認可を出します。なぜこんな話をしたかという、みなさんが神学と聞いて、そんなの自分には関係ない話だと思うのではないかと考えたからです。

社会科学には経済学、法学、政治学、社会学などが含まれます。

以上は研究、科学を対象で分類して構造化したものです。みなさんにも馴染みのあるものだったのではないのでしょうか。大学の学部や学科の成り立ちも、だいたいこういうもので分けられていますから。さっきも言ったように、複数の対象にまたがっている研究もありますね。これを「学際的」といいます。国と国の間のことを国際というのと同じように、学問と学問の間のことを学際といいます。今の大学の研究室はどれも何らかの意味で学際的なのだと思います。本当の理論物理学をやっているところなんかはそうではないのかもしれませんが。

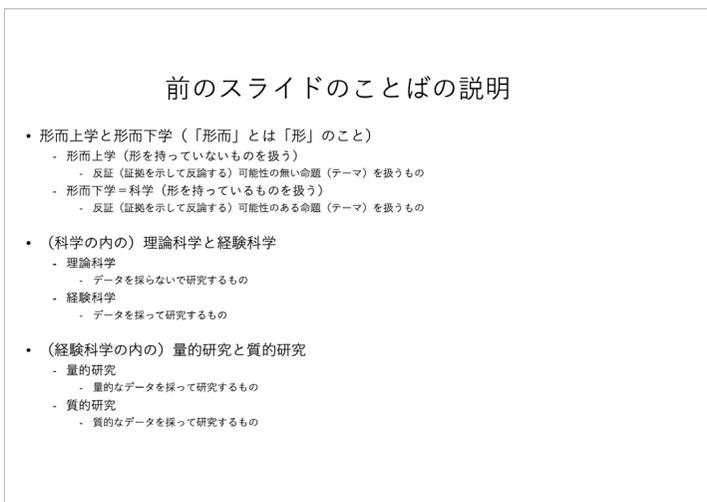
対象による区分とは別の分け方もあります。それを今から説明します。

ひとつは、認識論やアプローチによる分類です。認識論というのは、知るとはなにかとか、わかるとはなにかとか、わかるものは何なのかとか、何をわかろうとしているのかとか、そういうことです。たとえば事実というものがあるのか、事実をわかろうとしているのか、事実ではなく事実の意味をわかろうとしているのか、それが認識論です。これで分類すると、反証可能性のない命題(テーマ)を扱うのが形而上学、反証可能性のある命題を扱うのが形而下学で、後者が「科学」です。反証可能性とは何かという、証拠を示して反論する可能性があるかどうかです。反証可能性は、あるから良い、ないから悪いというものではありません。たとえば、「神は愛である」という神学の命題には、証拠を示して反論することができません。ある人が人生における過酷な体験を開示して、このようなことがあったのだから神が愛であるはずがないと主張した場合、その人は証拠を示して反論したつもりかもしれませんが、「そんなあなたがここまで立派に生きて



いるのは神様の愛のおかげですね」と言われてしまえばそれまでです。つまり、この議論において、証拠には意味がないのです。形而上学というのはこのような学問です。

それに対して、証拠を使って反論できるようなものを扱うのが形而下学で、これが科学なんです。この証拠は、今見つからなくてもいいです。まだ先でいい。「将来、こういう証拠が出てくるとこじゃないと言える」という議論をするのが科学です。たとえばアインシュタインが存在を予測した重力波は、60年経って観測されました。だから、今まだ証拠が見つかっていなくてもいいんです。証拠が見つかる可能性があって、その証拠が見つかるとうだと言える、という議論が科学の議論です。ただし複合領域になってくるとこのふたつが混ざる場合もあります。たとえば生命科学は自然科学として研究できますが、生命倫理学となると、科学と科学でないものが混ざります。

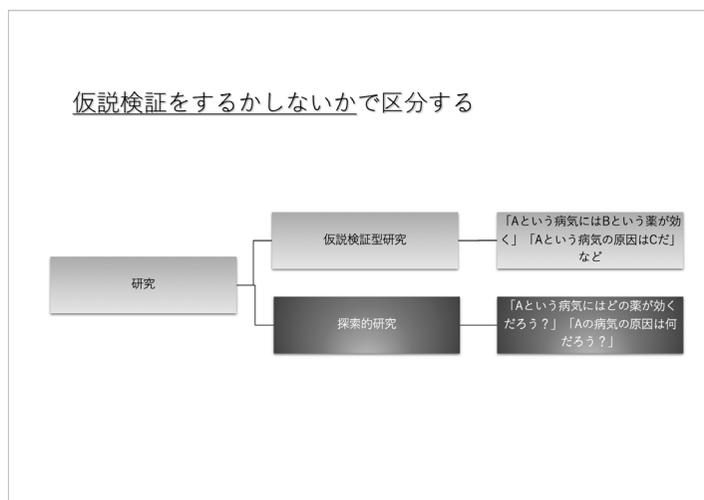


科学のうち、データを採取しないものが理論科学、データを採取するものが経験科学です。最近のノーベル賞は理論的に導き出されていたものが、実験か観測によって証明されないともらえませんね。これには苦い歴史があって、賞を出しちゃったら違っていたということがあったのです。そういうことがあるので、理論物理学者は若いうちに先進的な理論を出して、その後元気に生きていないといけません。ノーベル賞は研究に出す賞ではなく人に出す賞ですから、亡くなった人は受賞できなくなってしまいます。

さて、やっと出てきましたね、経験科学。データ採取をする科学が経験科学です。みんな科学っていうと測定するとか計測するとか、データを取るものだろうと思っていますが、それはここなんです。このなかで、量的なデータを採取するもの、数をかぞえたりサイズを測ったりするのは量的研究です。それに対して質的なデータを採取するのが質的研究です。ではどうやって採取するかというと、観察をして記録をするとか、聞き取り調査をして記録をするとか、そういうことです。今日のお話はこの部分です。

私は質的研究者ですし、質的研究の方法論について本を書いています。私はよく言うのですが、量的研究をしている人にとって、質的研究はとても遠くにあるような感じがするものです。でも、このようにしてみると、いずれもデータを採って分析をして何かを論じる科学ですから、非常に近いところに位置づけられます。私に言わせれば双子のようなものです。まったく相容れないものだと思っている人もいるのですが、そうではありません。

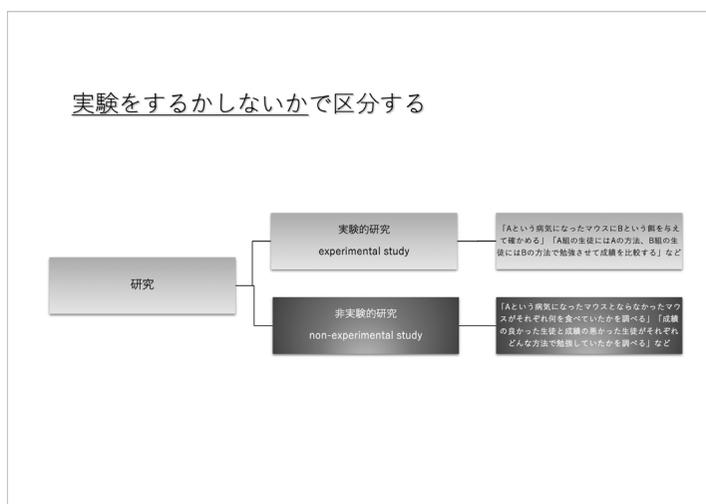
私がワークショップで質的研究の話をするときには、質的研究を量的研究と対比して説明することが多いです。量的研究のことを理解している人が多いので、量的研究だったらこうですけど質的研究のときはこうなりますよ、と話すとうわかってもらえます。繰り返すと、今日話す質的研究は、形而下学の内経験科学の内質的研究、ということになります。



さらに他の区分の話をしておきましょう。仮説検証をするかしないかです。仮説検証をするのが科学だと思っている人が多いのですが、それは幻想です。確かに科学の多くが仮説検証をしますが、しないものもあります。しないものも立派に科学なんです。

仮説検証をする研究はどのように行うのでしょうか。「A という病気には B という薬が効くはずだ」という仮説を立てたら、A という病気の人に実際に B という薬を与えて効くかどうかを調べる。あるいは、「A という病気の原因は C という食べ物なのではないか」という仮説を立てたら、実際に A という病気になった人とならなかった人について過去に何を食べていたか調べて、やっぱり C を食べていた人が病気になったのだと確認する。タバコと発がん性のようなものですね。タバコを今から吸わせていくのではなくて、今がんになっている人が過去にタバコを吸っていたかどうかを調べます。このように、検証の過程では、これから与えていく場合もあるし、遡って調べていく場合もあるのです。どちらも仮説検証と呼ぶことができます。

それに対して探索的研究というものがあります。「探索」の英語のエクスペローレションには探検という意味もありますよね。A という病気の原因は何だろう、いったいどんな薬が効くだろう、のように調べる研究が探索的研究です。探索的研究にも立派な研究がたくさんありますが、なぜか科学というものは仮説検証をするのだという視野の狭い考えが広く共有されてしまっています。



もうひとつの区分は実験をするかしないか、言い換えると実験的研究か非実験的研究かです。実験的研究というのは、たとえば B という食べ物を与えたマウスが A という病気になるかどうかを確かめることで、A という病気の原因が B という食べ物であることを検証するような研究です。それに対して、A という病気になったマウスとならなかったマウスとがそれぞれ何を食べていたか調べるような研究は実験を行いませんから、非実験的研究です。別の例を出すと、A 組の生徒には A の方法で、B 組の生徒には B の方法で勉強させて成績を比較するならば実験的研究、成績の良かった生徒たちと成績の悪かった生徒たちがそれぞれどんな方法で勉強していたかを調べるならば非実験的研究です。このように、実験をしない研究もあって、それも科学なんです。

4. 今日の質的研究は

- 質的なデータを扱う だけでなく
- 仮説検証をせず
- 実験的研究状況を設定しない

- このようなアプローチを「自然主義的naturalisticアプローチ」と呼ぶ。
- このアプローチでは、実験をするのではなく、実際にできごとが起きている状況に研究者が身を置いてデータ採取をするので、「生態学的妥当性ecological validity」に優れているとされる。

仮説検証をするかしないか、実験をするかしないか、これらの軸は独立していてひとつにまとめられません。今日話す質的研究は、「仮説検証をしない」かつ「実験の状況を設定しない」研究です。仮説をもって、その仮説を証明しようとするような研究は、いくら質的なデータを使っても質的研究とは言いません。実験の状況を設定する場合も同じです。こういうアプローチを自然主義的アプローチと言います。ちょっと難しそうに聞こえるかもしれませんが、とりあえず「自然にやる」という認識でよいかと思います。実際にできごとが起きている場所に身を置いてデータをとるため、「生態学的妥当性」に優れているという言われ方をします。

4. 今日の質的研究は（その2）

質的研究の多様な思想的系譜と手法的系譜



- **思想的系譜**
 - 現象学、解釈学、現象学的社会学、エコロジー、フェミニズム、批判理論、社会的構成主義、社会的相互作用（行為）論、認知心理学（とくに状況論や社会文化的アプローチ）、ネオ・マルキシズム、ポストモダニズム、科学哲学、文化人類学、言語学、記号論、構造主義、科学哲学、分析哲学、シンボリック相互作用論、フェミニズム、ポスト構造主義、社会的表象論、フェミニスト理論、クイア理論、批判的人種理論...
 - これらはそれぞれ質的研究の「パラダイム」（後述）になる。
- **手法的系譜**
 - 解釈学的手法、現象学的手法、自然主義的手法、構成主義的手法、脱実証主義的手法などと呼ばれる手法
 - 具体的には民族詩学（エスノグラフィ）、エスノメソドロジー、グラウンデッド・セオリー、ライフストーリー、ライフヒストリー、ナラティブセラピー、文化心理学、カルチュラルスタディーズ等の手法が含まれ、社会科学におけるパラダイムシフトを志向してきた。

思想的系譜にはこのスライドのようなたくさんものがあります。これらは後で話すパラダイム、骨格のようなものになります。手法的系譜はどうやってデータをとるのかに関わります。今ここですべてを詳細に説明することはできませんが、本当にいろいろなものを背景に、現在の質的研究ができていることをわかってもらえるのではないかと思います。

5. 質的研究の手続き

- ① 研究的問い research question の設定
- ② 研究デザイン research design
- ③ データ採取 data acquisition
- この間にデータ処理（文字化など）が含まれる
- ④ データ分析 data analysis
- ⑤ 理論記述（理論化） theorization

ただし 1 → 5 と一方向にだけ進むのではない！（後述）

それでは、どうやって質的研究をするのでしょうか。このスライドの手順①から⑤を順番に見ていきましょう。ただし、研究を実施する場合に①から⑤の一方向に進むわけではありません。量的研究の場合は後戻りをしてはいけけないので、たとえば統計的に分析を行ってからデータを足してしまったらインチキですが、質的研究はそうではないのです。

① Research Question の設定 量的研究では得られない知見を得る

- 具体的な状況や過程はどうであるのか？
具体的な状況・過程の記述、product-oriented（結果志向）でなく process-oriented（経過志向）
- 外見的に観察・測定可能な事象より、その内側の意識や気持はどうであるのか？：個人・集団の内面的現実の解明（内面的現実というのは感情だけのことではない、集団の価値観や規範なども含まれる。）
- どういう仕組みや関わり合いがあるのか？：構造の解明
- どんな問題が潜んでいるか？：潜在する問題の発見



まずは、何を知りたいのかというリサーチクエスチョンを設定します。設定するまでのところを研究設問と言います。このリサーチクエスチョンでは、量的研究では調べられないようなものを知ろうとすべきです。たとえば、結果ではなく具体的な状況や過程はどうなっているのか。このことを、結果志向ではなく経過志向だということができます。たとえば、「この勉強をすると成績が上がる」というのは結果です。「どんなふうに勉強するのか、楽しんでやっているのか苦しんでやっているのか、発見をしながら取り組んでいるのか、自ら問いながらやっているのか」といったものは過程つまり経過です。また、外見的に観察・測定可能な事象より、その内側の意

識や気持ちがどうであるのか、個人や集団の内面的現実の解明も適切なリサーチクエスチョンになります。内面的現実というのは感情のことだけを言うのではありません。

みなさん考えてみてください。(ただし現在のビジネスマナーのようなものではなく、伝統的な社交上のマナーとしてです。)ここに2人の男女がいて、それぞれに私と知り合いです。しかし相互には知り合いでないとして。私とそのふたりを引き合わせるとして、先にどちらをどちらに紹介するべきでしょうか。男性を女性にでしょうか?女性を男性にでしょうか?私がいなくてふたりが互いに自己紹介する場合でも同じです。どうですか?正解は、洋の東西を問わず男性が先、女性が後です。ところが、その意味には文化による違いがあります。西洋の場合、女性を守るために、女性には相手について先に聞く権利を与えています。好ましくない人だと感じたら女性は名乗る必要がありません。日本は違います。日本の場合は、男性の方が偉いので先に名乗ります。間に人が入って紹介する場合も、男性を先に紹介しなければ男性に対して失礼です。この時、西洋と日本とで外見的には同じことをしていますが、内面的にはまったく違います。こういうことも内面的現実と呼ばれます。

他にも、構造の解明や、潜在する問題の発見も、質的研究のリサーチクエスチョンとして適切です。

②研究デザイン



- 量的研究のそれと同じではない
- またデザインは多様に存在する
- むしろ、ふたつとして同じデザインはないと考えてよい。(「質的研究に共通する唯一の点は、共通点がないということ」 Guba, E.G. and Lincoln, Y.S.: "Fourth Generation Evaluation" Sage Publications, Newsbury Park (1989) という、これを強調したことばも 30 年以上前には使われたくらい。)

続いて研究デザインです。質的研究の研究デザインは量的研究と同じではなく、また多様に存在するので、「質的研究に共通する唯一の点は、共通点がないということ」という言い方があるくらいです。これはグーバとリンカン (Guba & Lincoln) が 1989 年に言ったことです。質的研究は 10 年もすれば大きく変わるので、その後の 30 年以上の間にずいぶん変化しました。1989 年より前の頃は、質的研究は量的研究者から「そんなものは研究ではない」と強く批判されていました。そういう文脈を知っていると、この言い方に量的研究を逆批判するような含みがあることをよりよく理解できると思います。今ではある程度共通して用いられる研究方法も出てきます。

③データ採取 data acquisition 量的研究の「測定」に相当する部分

人から採取する

- a. 観察
- b. 面接（個別インタビュー）
- c. フォーカスグループ

人以外から

- 文書（文書研究 document study、文書分析 document analysis）
- 映像（映像分析）
- 人工物（人工物分析 artifact analysis）

データ採取は、量的研究でいうと測定に相当します。データを採るといことですね。人から採るには観察、面接、フォーカスグループといった方法があります。人以外から採る方法にはたとえば文書の研究があります。例を挙げると、看護学の世界には闘病記の研究というのがあります。それ以外に、書いたものだけではなく、映像を分析するものもあるし、人工物分析・工芸物分析もあります。たとえばある村に神事の時に使っていた人形があって、村が観光地化される過程でその人形が土産物になっていったとします。最近の人形が初期の人形からどんなふうに変ってきているのかを調べるとしたら、人工物分析の手法でデータを採取することができます。この場合も、物だけ、つまり人形だけを見るわけではありません。その村に昔から住んでいる人

a. 観察

- 非参加観察 (non-participant observation)
 - 研究対象となる営みに参加しない観察
- 参加観察 (participant observation)
 - 研究対象となる営みに参加する観察
 - 現地でボランティアをしながら観察
 - 指導案や教材と一緒に作った授業を観察
- 上の参加・非参加の区別は、その場にいるかどうか（直接観察 direct observation か間接観察 indirect observation か）とは関係がないことに注意
 - 指導案や教材と一緒に作った授業をビデオで観察すれば、間接観察だが参加観察



や製作に携わる人に話を聴くインタビューや制作過程の観察などもします。

観察は参加観察と非参加観察に分かれます。研究上の概念としてよく誤解されますが、ここで

いう「参加／非参加」というのは、その場にいるかどうかとは関係がありません。その場にいるかどうかを表現することばは「直接観察／間接観察」です。たとえば自分が教材作りに加わった授業をビデオで観察するのは間接観察ですが参加観察です。

b. 面接（インタビュー）

内容で

- ・ 構造化面接 (structured interview)
 - 聴くことは全て決まっている
- ・ 非構造化面接 (unstructured interview)
 - 聴くことは何も決めておかない
- ・ 半構造化面接 (semi-structured interview)
 - 上の2つの中間、聴くことが一部決まっている

形式で

- ・ 形式的面接 (formal interview)
 - 〇月〇日〇曜日の〇時〇分から〇〇で、
- ・ 非形式的面接 (informal interview)
 - 研究参加者との偶然的な会話や食事のときの会話などをインタビューデータとする

回数で

- ・ シングル・インタビュー
 - 一回だけ聴く
- ・ リピート・インタビュー
 - 一定期間くり返して何回か聴く（1ヶ月ごとに、半年ごとに…）



インタビューというと、記者やレポーターがマイクを向ける姿をイメージする人もいますが、聴き取り調査のことをインタビューといいます。内容面では構造化面接／非構造化面接／半構造化面接に分けられます。たとえば聞くことが全部決まっているのは構造化面接です。せっかく会うのにアンケート調査を読み上げるだけの様な調査があるの？と疑問に思うかもしれませんが、あります。たとえば電話でするインタビューは決まったことを聞く場合がよくあります。逆に全く決まっていないのが非構造化面接です。そして両者の中間の、ある程度決まっています、あとは相手の話を聞きながら、詳しく聞きたい部分を重ねて聞くような方法が半構造化面接です。質的研究でもっとも多く使われているのが、半構造化面接です。

形式では、形式的面接／非形式的面接という区分があります。いついつこの場所でインタビューをお願いします、と約束して行うのは形式的面接です。偶然に会った人と話したり、昼食の場で関係者の話を聞いたりするのは、非形式的面接です。非形式的面接はインタビューの始まりと終わりがはっきりしないことが多いので、研究倫理の面で配慮が必要です。あのときは雑談として話したんだから研究に使われたら困ります、というような可能性も考えなければいけません。

内容と形式で3×2の6種類あるかということ、そうはなりません。たとえば偶然一緒になった人と話すのにあらかじめ質問が決まっているということはありませんよね。ということは、非形式面接は非構造化面接か半構造化面接になるでしょう。

回数では一度きりのシングル・インタビューだけでなく、毎月、あるいは半年ごとなどに繰り返してインタビューするリピート・インタビューもあります。

フォーカスグループは、焦点化されたグループという意味ですが、研究対象となるある程度共通の条件や経験を個別に有する複数の人たち、または同じ経験を共有する複数の人たちから聴き取る方法です。スライドにあるような大変な経験をした人たちだけでなく、幸せな経験をした人

c. フォーカスグループ



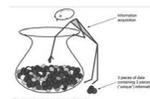
- 研究対象となるあるていど共通の条件や経験を個別に有する人たち（例：阪神淡路大震災を経験した人と新潟地震と東日本大震災を経験した人たち）、あるいは同じ経験を共有する複数の人たち（例：東日本大震災を経験した人たち）から聴き取る
- 互いの発言に触発され、ひとりひとりが言語化していなかった経験を言語化することが促進される
- インタビューと観察の両側面を有するため、最近ではフォーカスグループインタビューとは言わずFocus Group(FG)とだけ呼ぶかFocus Group Discussion(FGD)と呼ぶ。

たちに行うケースもあります。

フォーカスグループでは参加者がお互いの発言に触発されますから、それまで言語化していなかった個々の経験の言語化が促進されます。人間は経験したことすべてを言葉にしてはいませんよね。そこでみなさんに聞いてみます。今日のお昼ごはんは、パンではなくてお米を食べた人は手を挙げてください。その人たち、ごはんの歯ごたえやテクスチャ、なめらかさや固さはどうでしたか？言語化しましたか？していない？では、今思い出してみるとどうでしょうか。このように、人は自分の頭の中をいちいち言語化しているわけではありませんね。そして他の人が言語化するのを聞くと、「そういえば私のご飯はこうだった」というように豊かな言語化がなされていきます。

フォーカスグループは、インタビューと観察の両側面を有することになります。研究者から問いかけるときはインタビューですが、参加者同士が話しているときに研究者がしていることは観察です。したがって、以前はフォーカスグループインタビューと呼んでいましたが、今はフォー

d. サンプリング方法の類別



- 確率抽出法(probability sampling)
 - 量的研究で用いられる。
- 非確率抽出法(non-probability sampling)
 - 一部の量的研究と質的研究で用いられる。
- なお、質的研究では、samplingと言わず、participant recruitment（研究参加者リクルート）と言うことが確実に増えてきている。
 - Luisa Petrocchi-Bartal1* and Katijah Khoza-Shangase. (2014). Factors Influencing the Implementation of New-born and Infant Hearing Screening Programmes at Primary Health Care Clinics in South Africa. *Advances in Research*. 2(12). 935-949
 - Arjun Puri, Ben Kim, Olivier Nguyen, Paul Stolee, James Tung, and Joon Lee. (2017). User Acceptance of Wrist-Worn Activity Trackers Among Community-Dwelling Older Adults: Mixed Method Study. *JMIR Mhealth Uhealth*. 5(11): e173.

カスグループまたはフォーカスグループディスカッションと呼ぶようになりました。

サンプリングとはサンプルを採るということです。もともとサンプルというのは同じ測定を施す対象のことです。質的研究において、たとえば先ほど説明した半構造化面接のように相手によって異なる質問をする場合には、厳密な意味ではサンプリングと言えません。ただ、伝統的な量的研究の言葉を使って説明することが必要な場合もあるので、このスライドではそういう観点から紹介をしています。

確率抽出法というのは、恣意的にならないようにするためにサイコロを振ったり乱数表を使ったりするようなやり方をいいます。これに対して質的研究で使う方法は非確率抽出法です。ただし、スライドにもある通り、質的研究では「サンプリング」ではなく「研究参加者リクルート」という言い方をすることが増えています。

確率抽出法、非確率抽出法にはそれぞれ次のような方法があります。

確率抽出法(probability sampling)
量的研究で用いられる

- Simple Random Sampling
 - 単純なランダムサンプリング
- Stratified Sampling
 - 「層化抽出法」年齢別などで一定数ずつ抽出する。
- Systematic Random Sampling
 - 例：100の内20 必要なときに5番目ごとに抽出
- Cluster (Area) Sampling
 - 例：各県から20人抽出
- Multi-stage Sampling
 - これらを多段階に行う。例：地域で学校を選び(CS)、学年ごとに学級を選び(SS)、学級の中ではランダムサンプリング(qRS)をする。

質的研究では確率抽出法は用いられません。

非確率抽出法(non-probability sampling)
質的研究と一部の量的研究で用いられる

- Convenient sampling(便宜的抽出法)
 - 集めやすい人たち、頼みやすい人たち。
- Consecutive/Sequential sampling (継続的抽出法)
 - サンプリングと分析を繰り返す。
 - Grounded Theory の theoretical sampling はこれ。
- Quota sampling(クォータ抽出法) ← クォーター quarter ではありません。クォータ quota (区分・割り当て) です。
 - 層別を選ぶ(層別抽出法、層化抽出法と似ている)
- Judgmental(purposive) sampling / Critical case sampling
 - 特定の根拠で選ぶ
- Self-selection/Volunteer sampling (自己選択/ボランティアサンプリング)
 - 研究参加者が研究者にアプローチされるのではなく、研究参加者が研究者にアプローチする。
- Snowball sampling (スノウボール・サンプリング)
 - 研究参加者が次の研究参加者を紹介する(雪玉のように研究参加者が研究参加者を呼び寄せて大きくなっていく)

コンビニエントサンプリングは、集めやすい人たちをお願いする方法です。その次の継続的抽出法というのは「グラウンデッド・セオリー」という研究方法で用いるのですが今日は扱いません。

クォータサンプリング、これはクォーターではありません。区分とか割り当てを示す quota という言葉です。たとえば国会議員や市会議員の選挙で、男女の割合があらかじめ決められているやり方をクォータ制選挙といいますが、それと同じです。

ジャッジメンタルサンプリングでは、根拠をもって特定の相手に研究参加を依頼します。私の指導生が13回転職した人にインタビューしたことがあります。このような経歴を持つ人は稀ですから、どうしてもこの人に頼まなければなりません。これがジャッジメンタルサンプリングで行った研究です。

セルフセレクションやボランティアサンプリングは、研究参加者から「ぜひ話を聴いてほしい」と研究者にアプローチしてくるケースです。こうした参加者には、公にしたい事情がある場合もよくあります。そうした人が話をした後、今日は話ができて自分にとってもよかった、これまで振り返れなかったことを振り返ることができた、となって、同じ事情を持つ人を紹介してあげることがあります。このように、研究参加者が次の研究参加者を紹介し、雪玉が周りの雪を巻き込んで大きくなるように研究参加者が増えてゆくようなサンプリングを、スノーボールサンプリングと言います。

④データ分析

- (1) 基本は、研究対象に対する経験や研究的知見を背景に、記録を丹念に読み込んでいくこと。
- (2) コード化 (coding)
キーワードのようなものを付けていく
- (3) 理論的コード化 (theoretical coding)
- (4) 質的データ分析(qualitative data analysis)



データは言語記録の形で採られることが多いので、研究対象に対する経験や専門的な知見に基づいて記録を丹念に読み込んでいくことが、データ分析の基本です。ただ、読んでこうだと報告するだけでは、なぜそうなったのか、そう考えることは妥当なのかといった検討が読者にはできません。出てきた結果を他の人に見せて、これならいいですねと思ってもらうために、いくつか手法が存在します。

まずはコード化。キーワードのようなものをつけていきます。理論的コード化というのはさきほども名前をあげた「グラウンデッド・セオリー」という研究方法の言葉なので今日は扱いません。

a. コード化 (coding)

- 選定された、あるいは標準化されたコード群から付す テンプレートコーディング template coding
 - 複数のコーディング作業員 (coder) 間の一致度を見たり一致したものだけを採用したりして、コーディングの客観性を高めることもある。むしろ量的研究で使用。
 - 記録を読みながら探索的に自由に付す フリーコーディング free coding, 生成的コーディング generative coding
 - 今日の質的研究の多くは後者を採用
- (b. 理論的コード化は、Grounded Theory という研究方法で用いられるものです。)

ん。それから質的データ分析を行います。順に説明します。

コード化には種類があります。あらかじめ用意されたコードの中から選んでつける方法をテンプレートコーディングと言います。この方法を使うときは、複数の作業員が同じ記録を分析して一致度を確認したり、一致したものだけを使ったりすることがあります。むしろ量的研究で使われる手法と言えます。

それに対して記録を読みながら探索的に、その都度コードを考えてつけることをフリーコー

c. 質的データ分析 qualitative data analysis



- 付したコードを手がかりに、データを変換 (conversion), 縮約 (compression) して表示 (display) し、データに潜在する意味を見いだす。
 - 要素を表に書き込み、その表を操作して分析する質的マトリクス (qualitative matrix)
 - 要素同士の意味上の関連や因果関係等を矢印や曲線で結んだ意味ネットワーク (semantic network), 因果ネットワーク (causal network)
 - これらは量的手法における統計的手法に相当する。

ディングとか生成的コーディングと言います。今日の質的研究はこちらを使います。

質的データ分析では、付したコードを手がかりにデータを変換、縮約、表示してデータに潜在する意味を見出します。要素を表に書き込み、その表を操作して分析する質的マトリクスや、要素同士の意味上の関連や因果関係等を矢印や曲線で結んだ意味ネットワーク・因果ネットワーク

表2 質的マトリクスの例「企業意思決定の早さの分析」

企業名	決定事項	選択肢数	選択枚	検討方法
ザップ社	業務提携	4	①新製品 ②株式・社債公開 ③銀行からの借り入れ ④ベンチャー・キャピタル	同時
フォア・フロント社	新製品	3	①新製品 ②既存製品の拡張 ③新規市場	同時
プロミシング社	戦略	3	①現状維持 ②既存市場と新製品への主要な戦略的変更 ③新興市場の利用面での小さな戦略的変更	同時
トリアンパ社	戦略	4	①現状の戦略の精緻化 ②技術売却 ③事業売却 ④主要な戦略の変更	同時
	新製品	2	①オンライン・プロダクト ②3ドルからハイエンドまでのプロダクト	同時
オニクロン社	戦略	2	①主要な戦略的シフト ②販売と製造のマネジメント改善	順次
	戦略	2	①製造の大きな戦略的変更 ②製品と市場における大きな戦略的変更	順次
ニュートロン社	業務提携	2	①社内提携 ②外部提携	順次
アルファ社	新製品	2	①B2B 互換性製品 ②オンライン・サービス製品	順次
プレジデンシャル社	新製品	2	①家園の共同出資企業との集積回路製品 ②日本の共同企業との別のマイクロ製品	順次

(Eisenhardt, 1999 をもとに作成)

質的マトリクスの例

などがあり、これらは量的手法における統計手法に相当します。

これは私の本に載っている例ですが、いくつかの会社の意思決定についてまとめた表です。元は英語だったものを訳しました。上から、意思決定が早かった順に並んでいます。ここからわかるのは、選択肢の数が多いか少ないかと、かかった時間の長短との間には関係がないということです。選択肢が多いと時間がかかるとは言えません。注目すべきは表の右端です。選択肢の検討を同時にしているのか、順次行っているのかですね。この研究者は、たとえ選択肢が多くてもそれらを同時に検討することによって、短期間で意思決定を行うことができるという結論を出しました。もちろんこの表だけを根拠にしたのではありません。何が効いているのかわからないな、おかしいな、と思いながらいろいろな人に尋ね、こうかな？と思うことをフォローアップインタビューで再度尋ね、だんだん明らかになったのです。この表を見ると、すごく説得力があります

表3-1 質的マトリクスの例「施設ごとのプログラム導入状況（施設の入力値）」

	プログラムA	プログラムB	プログラムC	プログラムD	プログラムE	プログラムF	プログラムG	プログラムH
施設1	○	○	○	○	○	○	○	○
施設2	○	○	○	○	○	○	○	○
施設3	○	○	○	○	○	○	○	○
施設4	○	○	○	○	○	○	○	○
施設5	○	○	○	○	○	○	○	○
施設6	○	○	○	○	○	○	○	○
施設7	○	○	○	○	○	○	○	○
施設8	○	○	○	○	○	○	○	○

表3-2 質的マトリクスの例「施設ごとのプログラム導入状況（導入プログラム数と導入施設数を計算した値）」

	プログラムA	プログラムB	プログラムC	プログラムD	プログラムE	プログラムF	プログラムG	プログラムH
施設1	○	○	○	○	○	○	○	○
施設2	○	○	○	○	○	○	○	○
施設3	○	○	○	○	○	○	○	○
施設4	○	○	○	○	○	○	○	○
施設5	○	○	○	○	○	○	○	○
施設6	○	○	○	○	○	○	○	○
施設7	○	○	○	○	○	○	○	○
施設8	○	○	○	○	○	○	○	○
	5	8	2	3	4	3	6	1

表3-3 質的マトリクスの例「施設ごとのプログラム導入状況（導入プログラム数と導入施設数の平均値を算出した値）」

	プログラムA	プログラムB	プログラムC	プログラムD	プログラムE	プログラムF	プログラムG	プログラムH
施設6	○	○	○	○	○	○	○	○
施設7	○	○	○	○	○	○	○	○
施設3	○	○	○	○	○	○	○	○
施設2	○	○	○	○	○	○	○	○
施設4	○	○	○	○	○	○	○	○
施設1	○	○	○	○	○	○	○	○
施設5	○	○	○	○	○	○	○	○
施設8	○	○	○	○	○	○	○	○
	8	6	3	4	3	2	2	1

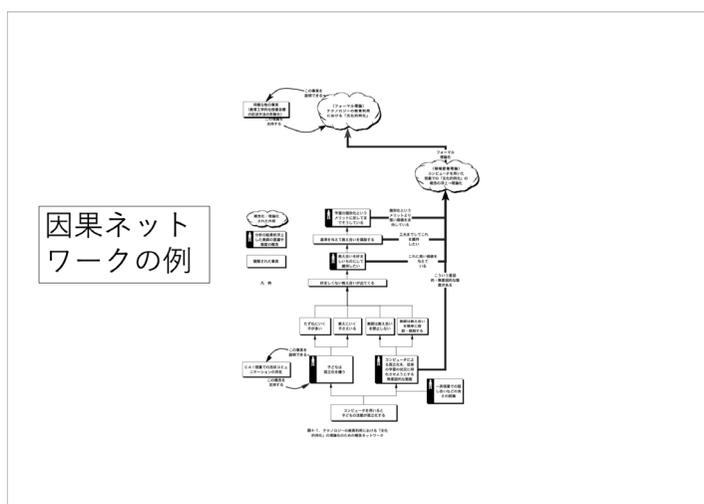
質的マトリクスの例

よね。

もうひとつ例を見せます。これはいくつかの施設で、いくつかのプログラムを入れたかどうか

を表にしたものです。学校に教育プログラムを導入する、あるいは病院に医療プログラムを導入するところを想像するとわかりやすいかもしれません。プログラムを入れたら丸をつけ、入れなかったら丸をつけません。この作業を終えた一つ目の表を眺めても、何もわかりませんね。そこで、2つ目の表のようにプログラム数と施設数をかぞえて書き込みます。数字の大きい順に並べ替えるとどうなるでしょうか。最も多くの施設に導入されたプログラムが一番左に、また、最も多くのプログラムを導入した施設が一番上にくるように並べ替えたものが一番下の表です。すると、施設3のプログラムGは、丸になっていそうなのになっていないということがわかります。3のGが特別だということに、最初の表で気づくのはとても難しいと思いますが、最後の表ならば一目瞭然ですね。このことを踏まえて記録を調べたりインタビューを行ったりしながら検討をすれば良いということになります。

このように、質的データ分析の場合、質的なデータの中に潜んでいる意味をバーンと目の前に見せてくれるような処理の方法が必要です。



これは因果ネットワークの例で、1997年の本に書いたものです。コンピュータを使って学ぶCAIという授業のやり方があるのですが、この方法を用いる授業では、人間同士が教え合いをしてはいけません。CAIが正しく機能しているとき、ある子が問題を解いて間違えると、コンピュータが間違えた理由を判断し、できなかったことができるようになるように必要な練習問題を選択して提供します。もし横から先生や他の子どもが教えてしまったら、その子は間違えませんが、理解できていない部分があっても練習の機会を得られなくなってしまいます。ある先生が「子どもは正しく間違える」と言いましたが、何かしらの論理があって間違えているのですから、どうい論理で間違えたのかをコンピュータが判断できるようにしなければならないということですね。

そうであるということは先生もわかっているのですが、じつは、わかってもなお教えてしまっているケースがあります。そこで、教えてはいけないとわかっているのにどうして教えてしまうのかのかということ进行分析したのがこの図です。私が自分の研究に使いました。

6. 量的研究と質的研究のパラダイム

パラダイムの違いはたとえばインタビューではどのように表れるか？

量的・実証的研究でのパラダイム（存在論と認識論）

- 回答者は話すべき客観的体験や知識を持っている。
存在論 = 客観主義的実在論 objectivist realism
- インタビュアーはできるだけ中立的な立場で、それをそのまま引き出すべきだしそのまま引き出せる。
認識論 = 実証主義 positivism



さて、今度はパラダイムのお話をします。パラダイムというのは存在論と認識論、そして価値観のことです。例を出しましょう。量的・実証的研究でのパラダイムにおいてインタビューをどう考えているかという、回答者は話すべき客観的体験や知識を持っていると考えます。だからなるべく中立的な立場でそれを引き出すべきだし、引き出すことは可能だということになります。これが、存在論的には客観主義的実在論で、認識論的には実証主義の場合のインタビューの理解

今日の質的研究のパラダイム（存在論と認識論）

- インタビュイーは、インタビュアーが自分にとってどういう存在か（理解者か批判者か？ 敵か味方か？）、このインタビューが自分にとってどういう意味があるか（単なる記憶の想起と再生か？ 自分の人生の振り返りの機会か？）などによって、意図的・無意図的に話す内容を変える。あるいはまた、それを探るために話す。
- そもそもインタビュイーは、自己の体験のほとんどを言語化していない。言語化するの、インタビュアーにたずねられてそれに答える時である。
- つまりこの言語化（テキスト化）はインタビュアーとインタビュイーとでつくりだす相互行為論的状况の上に成立する。
- インタビューとは、インタビュアーとインタビュイーとの間でそのつど共同構築される共同構築的テキストである。
- 社会的構成主義 social constructivismや相互行為論 interactionism

です。量的研究のほとんどはこれです。

それに対して質的研究のパラダイムではどうなるのでしょうか。インタビュイーはインタビュアーが自分にとってどういう存在なのかによって、意図的・無意図的に話すことを変えます。たとえばその人にとって聞き手が批判者だと思われるか理解者だと思われるか、もっと簡単に言うと敵か味方かによって、はっきり意識しなかったとしても話す内容は変わってしまうでしょう。

相手がどういう人なのか探ることを目的とした発言というのもありえます。また、話し手にとってそのインタビューがどのような意味を持つかによっても話す内容は変わります。

そもそも人は、自己の体験のほとんどを言語化していません。言語化するのは尋ねられて答えるときです。そう考えると、インタビューとは、インタビュアーとインタビューイとの間でその都度共同構築される共同構築的テキストであると言うことができます。これは社会的構成主義とか相互行為論の考え方ですね。今日の質的研究ではこのように考えるのです。

“インタビューとは
交渉（すり合わせの）結果としてのテキスト Negotiated Text である”



- Andrew Fontana and James H. Frey (2000) "THE INTERVIEW: From Structured Questions to Negotiated Text" in Denzin & Lincoln(2000) Handbook of Qualitative Research, Second Edition. Sage
- 訳書：質的研究ハンドブック3巻－質的研究資料の収集と解釈－NKデジジ、YSリンカン編、平山清義監訳、大谷 尚、伊藤 勇 編訳、B5判 496頁 5880円（税込）<第1部 経験的資料の収集・分析法 第1章 インタビュー：構造化された質問から交渉結果としてのテキストへ：大谷 尚訳>

これは私が編訳した本ですが、この中に「インタビューとは交渉の結果としてのテキストである」ということばがあります。

その箇所の冒頭では、シェークスピア『ハムレット』の一節が引用されています。ハムレット王子が侍従長のポローニウスと空を見ているシーンです。ハムレットが「あの雲はクジラに見えないか」と尋ねると、ポローニウスは「その通りクジラのございますね」と返します。するとハムレットは「いや、風が動いてイタチのようになってきたぞ」と言い出します。ポローニウスは「はい、今はまさにイタチのございますね」なんて返します。

これは宮廷での権力関係を背景とした Negotiated Text である、と著者は書いています。何に見えるかは、ふたりの間で決まっていきます。ハムレットとポローニウスはインタビューをしているわけではありませんが、同様のことがインタビュアーとインタビューイの間にも起きるといふことです。

最後に質的研究の固有の問題にも触れておきたいと思います。量的研究の場合、客観的なデータを採取しますから、それぞれが誰のデータであるのかということとは関係なく分析します。つまりデータから個人の情報を切り離して分析することができます。だから量的研究では匿名化ができるということになります。

ところが質的研究の場合には、研究対象となる個人や集団の営みを詳細に観察しますし、詳細に話を聞き取りますが、誰が語ったかということは最後までわかった状態で分析を行うことになります。論文を書くときには研究参加者の名前を出さないとしても、研究者本人にとっては匿名

7. 研究倫理に対する深い配慮の必要

- 量的研究が客観的なデータを採取するのに対して、質的研究は研究対象となる個人や集団の営みを詳細に観察し、またその話を詳細に聴きとる。
- つまり、量的研究に比べて、研究対象に関するはるかに多くのプライバシーあるいは個人情報を取得。
- また、質的研究者の参加は、対象となる個人や集団の営みに影響を与える。
- 質的研究は身体的な侵襲性は低いが、精神的、心理的、社会経済的な侵襲性が高い場合がある。したがってその内容についても、常に倫理的に検討する。
- その研究が研究参加にどのような害 (harm) を与えるかを常に検討する必要がある。
- また、研究倫理への配慮の質が、採取されるデータの質を左右することも重要。

化されません。

また、質的研究者の参加は営みに影響を与えます。たとえば授業を見せてもらうとき、そこにいてだけで授業のじゃまになる可能性がありますよね。見られているのが気になってちゃんと勉強できない、みたいなこともあるかもしれません。

注射を打つとか薬を飲ませるといった、相手の身体の恒常性を乱すような刺激を与える働きかけについて、医療の世界では身体的な侵襲性を持つと表現します。質的研究は身体的な侵襲性は低いのですが、精神的・心理的・社会経済的な侵襲性は高い場合があります。たとえば、つらい経験について尋ねることで、話をしながらつらい気持ちになってしまうインタビューというものがあります。ですから倫理的な配慮が大変重要です。

どんな研究でも、研究参加者に対して何らかの害を与えます。インタビューのために時間を使うことも、広い意味では害と言えるでしょう。どんな害があるか、どうしたら避けられるか、どの程度の害ならそれを押しても話したいと思ってもらえるか、きちんと検討しなければなりません。

研究倫理への配慮の質がデータの質を左右するということも、強調しておきたいと思います。「この人は私が知られたくないことを誰の発言かわかるような形で論文に書いてしまうのではないか」と疑っている人は、本当の気持ちを語れません。本当の気持ちを語ってもらえないようなインタビューでは良い研究はできませんから、研究倫理のきちんとした研究であることと、そうであることが研究参加者に伝わっていることが必要なのです。

質疑応答

生徒 A：相互行為論的状况というのは、一人二役でも成り立つのですか。

大谷：たいへんよい質問です。私は博士課程の頃にハイデッガーを研究していたのですが、ハイデッガーは「独白というのは対話の欠如の様態だ」といっています。ひとりで何かものを考えていたとしても、その人の中にはもうひとりの自分が他者として存在しているということですね。きちんとものを考えられる人は、もうひとりの他者を想定して考えます。

こう考えると、物理的・身体的にひとりであったとしても、それをひとりであるとは言いつれないのですね。何を思ってそう聞いたのかはわかりませんが、原理的にはそうだと思います。なんでそう聞いたの？

生徒 A：フォーカスグループの説明で、互いの発言に触発されて言語化が促進されると書いてあって、それはひとりでもできるのかなあと思いました。

大谷：ひとりでやったらフォーカスグループとはいいません。ただ、自分ひとりで言語化を行うときも、そんな自分の中には他者が存在するのだと思います。そういう意味では、相互行為的な状況というのは、優れた人なら頭の中に作っているものだと思います。

〈この講義録について〉

「学びの杜・学術コース」は、本学の教員を中心とする研究者が、各専門領域における大学レベルの学びの機会を高校生に提供する無料公開講座である。教育発達科学研究科附属高大接続研究センターおよびその前身である中等教育研究センターが毎年夏休み期間に開催し、2005年の開始から19年目を迎えた。酸化性とか知の探究のたのしさ厳しさにふれることで自己の興味関心を内省し、将来のキャリアデザインにつなげてゆくことを目的としている。

2023年度は31名の講師による31の講義が行われ、高校1～3年生の生徒140名が参加した。本講義録は、8月4日に開催された大谷尚先生の講義「質的研究とは何か」の録音データを文字化して再構成した物である。